

第七五回宮城県仙台第二高等学校卒業式

祝辞

「グローバルな地球社会」は、時間、空間が短縮され、網の目のように形成され、ウクライナにおける戦争や、コロナ感染禍によって、日本もその影響から逃れ出ることができません。宮城県における、新型コロナウイルスによる感染拡大は今年になってもやまず、どうなるのか心配しておりましたが、だいたい落ち着いてきました。その結果、令和四年度宮城県仙台第二高等学校、第七五回卒業生に対する卒業式が、ここ講堂において、原則マスク着用せず、挙行されることとなりました。しかも、幸せなことに、卒業生の皆さんの「あなたふとあなうるわし 豊栄昇朝日の御影 そのかげを しるしとあふぐ」で始まる校歌斉唱を直に聞けるとのことになりました。

栄えある今日を迎えた卒業生は、

男子一七九名、女子一二九名、合計三〇八名とお聞きしております。

宮城県仙台第二高等学校同窓会を代表いたしまして卒業生の皆さんにお祝いを申し上げますと共に、一日千秋の思い出で今日を待っておられた保護者の方々に対しても衷心よりお祝い申し上げます。

正面正門から校舎を仰ぎ見ると、玄関前面壁に、レリーフの校章が掲げられております。真ん中に「高」の文字があり、その背後から後光が四方八方に放射している形態です。

もともと、仙台二中開校四年目（1903）に、徽章が制定され、旭日に中の字とし、帽子には二本の白線をつけることになったとのことです。校章の

八方に放たれた放射光は、日光であります。芭蕉の『奥の細道』をひもとくと、日光山詣の際註1「あなたふと青葉若葉の日の光あおばわかば ひ ひかり」という句が思い起こされます。太陽は、日の本ひもとに生活しているわれわれのみならず取り囲む自然を照らし出し、生きるエネルギーを森羅万象に与えてくれているのです。

その当時の笹倉新治二代目校長は、太陽礼賛者であり、太陽になぞらう人倫を解き、八方に放たれた放射光は、それぞれ「正義」「自由」「剛健」「質実」「平和」「友愛」「協同」「自治」を象徴シンボルしていると、生徒に説明したといわれています。現在の二高生においても、これらの建学の精神は生かされているのではないかと思います。

校歌は、明治四十一年（1908）年に完成しました。代々国学者の家系である、開成所（後の東京帝国大学）出身の大関鶴磨先生が作詞、音楽取調掛（後の東京音楽学校）卒業の岩城寛先生が作曲を担当しております。

本校の最近の歴史を振り返りますと、平成十九（2007）年に男女共学になり、十六年目を迎えております。青踏社の平塚雷鳥は「元始 女性は実に太陽であった」と述べています。おそらく、記紀に登場する天照大御神あまてらすおおみかみを太陽神の性格を持つ存在として、イメージしていたのでしょう。雷鳥は、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和を願っております。「すべて国民は、法の下に平等であって、人種、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。」と日本国憲法十四条の成文化につながり、現在、宮城県でも、「男女同権」はもとより、高校における「男女共学」も、社会通念となってきました。

今年一月、「河北文化賞」授賞式があり、出席しました。そのおり、『Na

noterasの光で、東北から日本を変える』という講演がありました。「ナノテラス」という名称は、あまてらすおみかみ天照大御神にちなんで「アマテラス」の「アマ」を「ナノ」に置き換えてたと、高田昌樹東北大学教授が述べておりました。この次世代放射光施設「ナノテラス」は、「ナノメートル（百万分の一ミリ）まで見える巨大な顕微鏡」といえます。原子、分子の構造配列までを可視化し、遺伝子、ゲノム解析にもつながり、創薬や医療技術、省エネや環境保全、食の安全などへの応用、脱炭素社会の実現や感染症対策などにも貢献しうる施設だとのことでした。

政治、経済、法律、生活、文化のあらゆる領域が、互いに密接につながる「グローバルな地球社会」の構造的変容に対応した政策、ソサエティ5.0 (Society 5.0) の一例として、産学官が一体となって進められているといえます。新たな日本創生の原動力にもなることでしょう。

日本列島という、東北、仙台という「ローカルな地域社会」と、「グローバルな地球社会」との協働による理想的な形態を実現するのは、ここに列席している皆さんをはじめとする、若人の、多様性に満ちた生きるエネルギーの集積であると確信しております。

宮城県仙台第二高等学校同窓会会員一同、並びに教職員一同、皆さんのご卒業を心からお祝い申し上げます。本来の真の自己探求に励み、まわりの人々の心身の痛みを和らげようと励み、ひいては未来の地球社会に貢献しうる人間として成長することを、祈念し、祝辞といたします。

令和五年三月一日

宮城縣仙臺第三高等學校同窓會

會長

佐藤一郎



註1 「往昔、此御山を、一荒山と書しを、空海大師開記の時、日光と改たまふ。千歳未來を
さとり給ふにや、今此御光、一天にかゝやきて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖、穩也。猶
憚多くて、筆を差置ぬ。あなたふと青葉若葉の日の光」